
同窓会

山中幸盛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

同窓会

【Nコード】

N7227U

【作者名】

山中幸盛

【あらすじ】

約四十年ぶりに中学校の同窓会に出席し、その二次会での出来事。

*（お断り）このショートショートは、山中幸盛のブログ「妻は宇宙人」に掲載されているものと同じのものです。

名倉憲也は蟹江中学校を卒業して以来初めて、約四十年ぶりに同窓会に出席した。高校卒業と同時に蟹江町から三十五年間離れていたこともあり、初めての参加だった。会場は学区内にある観光ホテルの大広間で、夕刻六時からの開会だ。憲也はあまり気乗りしなかったのだが、幹事の尾関に電話で拝み倒されて、なんとなく出席してしまった。

来てみて後悔した。参加者のほとんどが、当時、部活や成績の面で目立っていた連中で、順当に出世したであろう「勝ち組」の奴らだった。憲也はどちらかといえば「負け組」で、当時の成績は保健体育を含めて中の中、部活は帰宅部、性格は極端に内向的だった。友人は限られていた。その数少ない遊び仲間の姿が見当たらない。たぶんみんな今でも「負け組」だから、出席する気持ちにはなれないのだ。

まず、だだっ広い大広間に口の字型に設けられた席の、どの位置に座るかで迷ったが、腹を決めて五人分空席があった場所の真ん中に腰を据えた。やがて空席が憲也の左隣りだけになった。そしていよいよ尾関が開会の挨拶を始めようとしたその時、左隣りの席に見覚えのある男が座った。一緒に魚釣りをしたこともある男なので名前をすぐに思い出せた。

「中川君だっけ？」

「名倉だろ？」

憲也はやっと、懐かしい遊び仲間にも再会できたので気が楽になった。中川とは二学年の時に同じクラスで、成績も憲也と似たり寄ったりで性格もひかえめ、部活動も一学年で同じ陸上部だった。二人とも熱心に練習するタイプではなく、同じように帰宅部員になっていた。

しかし三学年になると別のクラスになったので、以来、今日まで

ずっと疎遠になっていた。憲也と中川は四十年間のブランクを埋めるべく語り合った。中川の実家は農家で、現在では小さな不動産屋に勤めながら、駅の近くにある田んぼを月極駐車場にしたりして生計を立てているらしい。

同窓会が終わり、尾関が近所のカラオケ店やスナックに繰り出そう、と二次会を呼び掛けたので、まだ話足りない憲也と中川もスナックに入った。熱心な中日ドラゴンズファンのように、店内の壁には選手と一緒に写っている写真やサイン入り色紙、サイン入りバットなどが飾り付けてあった。

その小さなスナックは同窓生で満員になった。六組くらいに分かれて盛り上がる中で、憲也と中川はカウンター席の片隅で語り合った。やがて趣味の話題になり、憲也が小説を書いていることを告げると、中川は心底驚いた。

憲也は中川に尋ねた。

「君は何かやってるの？」

「極真空手が七段で棒術が六段。今でも現役だよ」

「すごい、人間、変われば変わるもんだな」

「お互いさまだ」

まったく、憲也が小説を書くだなんて誰も想像できないだろうし、中肉中背よりやや細身で背も低い中川が空手のそれほどの有段者だなんて、ほとんどの同窓生が知らないだろう。

その時、店の入り口付近で怒声がした。

「くそジジイ。俺にガン飛ばすだなんていい度胸してるじゃねーか、ちよつと表に出ろっ！」

見ると、同窓生の一人が、いかにもやくざ風情の若い二人連れに難癖を付けられ、男の一人から襟首を締められている。中川が憲也の耳元で「カラマレテいるのは医院を開業している山田だ」とささやいた。同窓生たちは一斉に話を止めて固唾をのんで見守る。そこに、幹事としての責任感からか尾関が割って入って仲を取り持とうとすると「出しゃばるな！」と、もう一人の男にいきなり殴り飛ば

されてしまった。そして二人は山田をむりやり店の外に連れ出そうとする。

その時、中川がおもむろに立ち上がり、すぐ横の壁に飾ってあった落合監督サイン入りバットを握りしめると、「待ちなさい！」と叫んで男たちの方に近づいて行った。男たちはバットを目にした途端に山田を解放し、身構えながら叫んだ。

「老いばれ、てめー、やる気か！」

中川は淡々とした口調で言った。

「あんた達、どこの組のもんだね。蟹江の黒川組かね。名古屋の稲葉会かね」

と言うと中川はズボンのポケットから十円玉を取り出し、右手の親指と人差し指でつまんで男達の方に差し出すとクニヤリと折って見せ、左手に持っていたサイン入りバットを逆さにして床に立てると、「ちよつと持っていて」と言っただけで近くにいた同窓生の両手を取ってバットの頭の部分を握らせた。二人の若い男は中川のやることを啞然と見ている。

「ちよつとイスを借りるよ」

中川はイスを倒し、バットを少し浮かせてバットのグリップの先をイスに当て、少し距離をとってからススツと前に出て、勢いよく右足首の少し上部をバットにぶつけて軽々とバットをへし折ってしまった。

中川が男達に向き直ってから言った。

「私はこれでも蟹江警察署で若い衆に空手を教えている。これ以上騒ぐと面倒なことになるから出て行きなさい」

二人の若者が捨てた台詞も言わずに無言で立ち去ると、「勝ち組」の同窓生たちは中川にパラパラと拍手を贈ったのだが、ところで、へし折れたサイン入りバットはどうなるの？

* 文芸同人誌「北斗」第579号（平成23年7・8月合併号）

に掲載

* 「妻は宇宙人」ウェブリブログ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7227u/>

同窓会

2011年7月9日03時10分発行